

しえない。それは釈尊の具足が五字受持者の己心のみ実現しうるものだからである。『観心本尊抄』の互具論が凡心具仏界から凡心具釈尊へと移行し、釈尊の因位果位論にまで発展しているのは、我等の成仏が単なる理論論的解明で証明されるのではなく、五字受持なる信仰的実践にこそ実現しうるからである。さらにまた、五字の受持が釈尊の因行果徳の受領であるゆえに、釈尊や地涌の菩薩を己心に具足しうるのである。天台大師の、本果妙の依文に「我等己心釈尊」、本因妙の依文に「己心菩薩」を証されたのは、聖人にとって本果妙とは久遠成道の釈尊、本因妙とは久成の人たる地涌の菩薩であるからである。

以上、『観心本尊抄』を中心に、聖人における釈尊の本因本果について概観した。日蓮聖人の本因本果の概念は久遠成道を本果、久遠の化導を本因とする点において基本的に天台大師と異ならないが、とくに観心において本因を地涌の菩薩として、受持の当処に本因本果を己心の所具とすることは他に例を見ないのである(1)。それは釈尊を論理的に規定してその本質を論証した天台大師に対し、聖人は受持という自己の主体において釈尊を受領していったことの異なりによるものである。

〔註〕

(1) 茂田井教亨先生は『観心本尊抄』に聖人の特異な四菩薩観があるとし、その第一にこれをあげられている。本稿は茂田井先生の教示に示唆されるところが大きい。

## 寿量頭本論―五百塵点劫の 解釈をめぐって

北川 前 肇

法華経本門の如来寿量品には、釈尊みずから始成正覚を破して、その寿命の久遠なることが開顕されている。すなわち、「然善男子我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫」と発迹頭が示されている。この次下には、釈尊の寿命が久遠であることを、更に五百塵点劫の譬喩をもつて説かれるのである。

この五百塵点劫の解釈は古来より論議が喧しく、有始・無始、常住・無常、実説・仮説等の解釈がなされてきた。そこで、この小稿では、日蓮聖人の遺文に引用され

た寿量品の「然善男子云」の発迹願本の文に着目し、五百塵点劫釈の一助としたい。

さて、聖人遺文中発迹願本の文の引用は、『守護国家論』『開目抄』『観心本尊抄』等である。それらの引意を検討してみると、まず『守護国家論』（定遺九四頁）では、法華経が如来出世の本懐であることを証明するための引用で、願本の問題は言及されていない。

次に『開目抄』（定遺五五二頁）では、本因本果の法門が明かされる段に引用されている。ここで注目されることは、「無始の仏界」「無始の九界」と表現されていることである。すなわち、発迹願本の久遠は、「無始」という概念を有つことが理解される。しかしながら、無始あるいは復倍上数と言っても、はじめがあり、有限ではないかという疑義が想定される。これに対し、聖人は五百塵点劫という量を藉りて表現された無量の世界、時間概念を超越した久遠無始を、そこに観取されたものと考えられる。つまり、五百塵点劫とは無始という解釈がここに見られるのである。

また、一つの問題として久遠の釈尊が「無始」であれば、それは理法身、真如身でなければならないのではないか提起される。しかし、聖人が始成正覚の迹因迹果

を否定し、久遠実成の本因本果を強調されていることは、非因非果の法身を正意とされたものではない。それ故に、本因本果の「本」とは、無始を意味し、その仏は理法身でなく、本因本果の具体性と能動性を具備した釈尊であると考えられる。『観心本尊抄』に「釈尊因因果徳二法」（定遺七一頁）と説かれ、『一代五時図』に「久遠実成実修実証仏」（同二三四二頁）と規定された如く、理仏ではなく事成の仏を想定されている。この本因本果の法門の次下には、諸仏はすべて釈尊の分身であることが明記される。

そして、更に三身の願本の問題に言及され、寿量品の仏のみ三身の無始無終（願本）が説かれ、爾前諸経には三身の願本は不説と述べられている。同じく『一代五時図』（同上）には、始成の三身の願本はなく、久成の三身を無始無終と図化されている。

論ずるまでもなく、無始無終とは三世常住を意味し、常住不滅と同義である。一般に真如を体とする法身の無始無終は理解できるが、何故に久成の三身を無始無終に配されたのか問題となるのである。これを解く鍵として『八宗違目鈔』（定遺五二五頁）の冒頭に、『文句記』の「若願本已本迹各三」、「文句」の「仏於三世」等有二

三身「於諸教中秘之不伝」の引用が見られ、この説を根拠として久成の三身を三世常住と規定されたものと推測できる。また、聖人は信仰的事実によって、三世に亘る積尊の生命と教化とを観取せられ、積尊の寿命に断絶はなく、もし断絶があつては寿量本仏たり得ないとして、無始無終の概念を付与されたものと考えるのである。

さて、次に『開目抄』（定遺五七六頁）には、発迹願本の文を引用して、久遠の積尊が十方分身諸仏の能統一者であることが説かれる。ここで注目されることは、「此過去常」という表現であるが、「この」という指示代名詞は発迹願本をさし、五百塵点劫は過去常と同義であることがわかる。過去常とは過去常住であり、寿量品ではこの過去常住に托して三世常住が開顕されたと見るべきであつて、五百塵点劫は過去常住と同時に、三世常住、無限をも意味するものであろう。

この『開目抄』では、積尊と諸仏との関係が明らかにされるだけでなく、依報たる国土の問題が述べられ、積尊が三世常住であれば、依報たる娑婆は本土となり、常住浄土であることが明記されている。これは「観心本尊抄」の「今本時娑婆世界離三災二出四劫一常住浄土」（定遺七一二頁）と同致をなすものである。

以上、『開目抄』を中心に願本の問題を考察したが、ここで指摘できることは、五百塵点劫とは久遠無始であり、過去常住を正意とするが、この過去常を媒介として三世常住が開顕されているということ。しかもその三世常住とは積尊の寿命を指し、その仏格は三身圓滿具足の無始無終なのである。つまり、積尊の無断絶の寿命と救済活動とが五百塵点劫の譬喩をもって示され、そこに永遠性と絶対性とがあると言える。そして、我等衆生は必然的にこの積尊と関わり、己心に内在する仏格はこの積尊にほかならない。それ故に、『観心本尊抄』に発迹願本の文を引いて、「我等己心積尊五百塵点乃至所願三身無始古仏也」と定められたものと考えられる。

## 吉田松陰と日蓮聖人

石川 教 張

幕末の思想家・吉田松陰は（一八三〇～五九）、自ら二十一回猛士と称し教育および規諫の実行に献身、三十年の短かくも波瀾に富んだ一生を救国の大義に殉じた。